

山を愛し,山の暮らしを誇る私の活動

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	藤井, キクエ
巻/号	119号
掲載ページ	p. 9-13
発行年月	2002年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



山を愛し、山の暮らしを誇る私の活動

藤井 キクエ*

1. はじめに

皆様こんにちは。ただいまご紹介をいただきました山口県の林業研究グループ連絡協議会の女性部会長をしております藤井でございます。よろしくお願いたします。

本題に入る前に私が住んでいる錦町のことをご紹介いたします。錦町は山口県の北東部、島根県と広島県の県境にあります。人口およそ4200人、面積約2万1000ヘクタール、千メートル級の山に囲まれ、全体の面積の90パーセントは山林です。森は木材を生産するだけではなく、水をたたえる天然のダムでもあります。水源の森、清流錦川、名水百選の寂地峡の水源として、日々の暮らしに森の恩恵を受けております。

次に我が家の経営概況ですが、山林15ヘクタール、栗梅30アール、畑わさび田30アール、そして普通の畑を10アールほど栽培して、細々と暮らしております。私が結婚したのは昭和24年で、同じ集落に住む遠縁にあたる主人と結婚しました。3人の子供にも恵まれて、今では8人の孫たちのお婆ちゃんです。

私自身について申しますと、昭和30年に農協正組合員となり、平成5年から総代をしております。一方森林組合の組合員になるためには、自分名義の山が10アール以上なければなりません。私が組合員になったのは、結婚して40年目に、主人からのプレゼントで山林が私の名義になったからです。昭和61年に県指導林業士として女性第1号の認定を受けました。

2. 林業に魅せられて

私と山との関わりのきっかけは、昭和53年に開催された婦人林業教室でした。この教室に参加して、山に目が向くようになりました。教室では枝打ち、間伐など専門的な勉強や、先進地の視察に参加しました。翌年夏に、町単位で勉強を重ね、58年には4ヵ町村の勉強会へと広がっていきました。手入れの行き届いた山を見て感化され、自分たちの山を育てたいとの思いが強くなったのです。

こうして仲間18名で錦町婦人林業研究グループを結成しました。私たちはまず、1人10アールの山を家族から借り受け、枝打ちや間伐の技術を高めるためのコンクールをしました。年々山に手が入ると、少しずつ山が変わってきます。きれいな山を見て、自信がついてきました。次に活動資金を得るために、町有林や森林組合の作業を請け負い、資金を作ります。これは現在も続けておりま



つるを使った籠作り

* (ふじい きくえ・山口県林業研究グループ連絡協議会女性部会・部会長)

す。

ちょうどそんな頃、山の手入れをしている時に、つるがたくさんあるのに気づきました。これを利用できないものかと思っていたところ、嫁が籠作りをしているのがヒントになって、つるで籐で籠やリースを作ることを思いつきました。さっそくその道の先生に頼み、無理を言って指導をしていただきました。初めて取り組んだつるの作品は、形も色合いも最高でした。今まで誰も振り向かなかったつるが大事な資源として利用できるとうわかった時の喜びは、今でも忘れることができません。

現在では作った籠は各種のイベントや木材祭り、デパートの売り出しで販売していて、大変好評です。数年前から若妻グループ、老人クラブ、県内林業研究グループ等につる材の講師として指導にまわっております。

こうした私たちの活動が、地域の人に認めれたのが、新しい動きが起こってきました。それまでは男性のグループとは別々に活動していましたが、是非一緒にやってほしいという要望が出てきたのです。平成5年に錦町林業振興会を結成し、同じ仲間として活動を始めました。

さらに、木炭の生産を手がけ、木酢液の利用方法も勉強しました。木炭は昔ながらの茅で炭俵を作り、販売をしております。交流会等にこられた方たちにも、炭俵を作っていただいたりします。また、広島の花フェスティバルにも出展しましたところ、籠も木炭も1日目に完売と大好評でした。改めて、町の人は自分で作ったもの、心のこもったものを求めていると感じました。

3. 草木染めに魅せられて

次は草木染めのお話をしてみようと思います。女性部会で出会った山の材料が活かされた活動に感動して、草木染めもしようと思分たちも取り組みはじめました。はじめは失敗に失敗を重ね、京都まで勉強に行きました。今思うと、あの失敗を重ねる経験によって女性部会の強い仲間意識を育てることができたと思います。

こうした活動に町や県が補助金を出してくれ、



草木染めの作品を紹介する藤井キクエさん

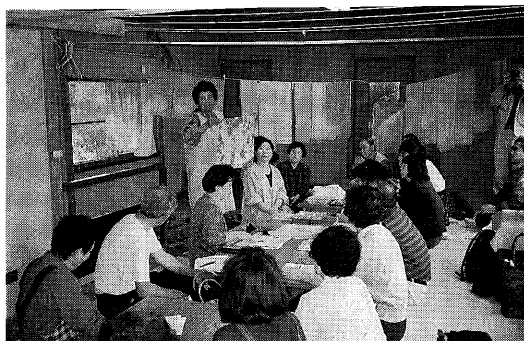
私たち自身も52万5000円ずつ出して、町の古い建物を改造して「なないろ工房」を建設することになりました。草木染めの魅力は、杉や桜、アケビ、そよごなど、季節にあわせ、生きた材料から様々な色を楽しむことができるところにあります。そして、その材料は山に豊富にあるのです。

例えば（持参した作品を示す。写真参照）、そよごで染めて作ったのれんも、ミョウバンの媒染でやった場合と、同じ染め方でも木酢液を媒染に使った場合では、色が異なります。京都に勉強に行つて学んだ藍で染めたスカーフも、2回、3回と染めると、色が変わってきます。他にもタマネギで染めたもの、こあかそで染めたものなど、それぞれの色に仕上がります。また、昔の帯の芯を取って染めて、それでバックを作ったものもございます。リースについても、つづらふじで編んだ丈夫で長持ちがするもの、アケビで編んだものなどがあります。

草木染めやつるを使ったリース作りなど、私たちの活動がほかの女性たちからも注目され、町内はもとより県内各地に出向いて指導するようになりました。

学校へも指導に出かけております。平成12年には県の林業関係の授業で小学校5年生を対象につる細工や草木染めの学習、体験指導に出かけております。町内の広瀬小学校では22人の子供にクリスマスリース作りを指導しました。そして子供達全員からお礼の作文が来ました。その一部をちょっと紹介したいと思います。

ほくは今日のリースづくりがとても待ち遠しかったし、楽しみでした。草木染めの時は2度



草木染めの指導風景

目だったけど、リース作りは初めてで、作り方や結果の形とかで心配の部分もありました。松ぼっくりなどを拾うのを土、日にするのを忘れていて、朝早く起きて拾いに行きました。作り始めてからちょっとたった時、友達のをを見て、とってもきれいにバランスよく作っていきました。僕も朝拾い集めてスプレーで色をつけた木の実を使い、だんだん作り上げていきました。真似はいけないと思い、すべて飾りをとったりしました。自分にとって気に入ったリースになりました。お母さんも「すごいじゃん」とほめてくれました。今日もめったに出来ないことをやらせてもらいました。とても楽しく、気に入ったきれいなリースになりました。藤井さん、西村さん、本当にありがとうございます。

「なないろ工房」は体験交流に来る人たちでいっぱい、女性部会はその対応で大忙しです。4月の下旬は、教育庁の福利厚生課の企画で、県内小中学校の先生方35名が体験に来られました。草木染めのすばらしさや、楽しさを語りながら教えております。その先生がまた子供たちを連れてこられ、体験交流の輪が広がっています。

4. 生涯現役にここに生き甲斐ある暮らし

—農産加工と朝市—

私は昭和44年に生活改善グループに入って様々な加工品を手がけました。庭にたくさんなっているゆずを使ってゆずみそをつくったり、わさび漬、こんにゃく加工、奈良漬など、農家でできるあらゆる加工に取り組みました。そして昭和52



農産加工所にて

年錦町の生活改善連絡協議会の会長になって、朝市に取り組みました。当時はまだ珍しく、県下で2番目でした。錦町金曜広場朝市といい、1周年記念には日本手ぬぐいを皆さんに配ったものです。

現在では町内にも朝市が増えてきました。“生涯現役にここに生き甲斐ある暮らし”をめざして様々な努力が続けられています。地域資源を再度見直し、新しい息吹を吹き込むことを目標に平成10年には「道の駅ピアライン」が開設されました。この道の駅の「顔」となっているのが、錦町ふれあい朝市協議会です。町内16の朝市から毎週日曜日に出店です。朝市参加者はほとんど高齢者で、高齢者ならではの技が光ります。女性や高齢者の長年培ってきた技、経験、そして維持してきた山の恵みが光り輝き、生活文化として発信されています。地域に芽吹いた資源を活かした暮らしの中から生まれた個性豊かな本物揃いの農産物、林産物と加工品です。

昭和58年に農産物加工所ができ、農家の加工も本格的に取り組み始めました。なかでもみそ加工は毎日農家の人でにぎわうようになりました。みその技術も定着して、委託加工にも取り組みました。また、売れるみそ加工にも取り組みました。代表者である私の名前をとって「キクちゃんみそ」と名づけて売り出し、今や道の駅などでも売られております。ラベルには私の似顔絵が張ってあります。大豆は自分たちが栽培したものを使い、手作りにこだわり、加工技術にこだわったみそです。

昭和60年、私が所属するやまびこグループでやまびこ加工所を発足させました。保健所の営業許可を取り、自分たちが学んだ加工技術を売れる商



ゆうパックの商品

品にしたのです。わさび漬け、柴漬け、みそ漬けなど本物づくりで好評です。とくにこれらを詰め合わせたゆうパックは好評です。注文で一杯でございます。漬け物にみそを加えて日本全国どこでも4000円で発売しております。

山口県は三方に海が開け、中国山地につながる内陸部や温暖な瀬戸内に広がる平野、豊かな自然から豊富な食べ物が生産されています。そこには風土を背景に旬の食材を上手に使った先人の知恵や、技術や技が日常の生活に活かされ、特色ある農山漁村の暮らしが営まれています。その特色ある農山漁村の暮らしを背景に、山口県では朝市が盛んで、300ヵ所あまりで開催されています。

また、この朝市を国道沿いのルートでつなぎ、日にちを決めてそのルートの朝市を一斉に開催するイベント「ルーラルフェスタ」が平成7年から開催され、人気をよんでいます。「ルーラルフェスタ」で朝市を広域に結ぶと、それぞれの朝市の違い、地域の違いが改めて見えてきます。朝市の根底にあるのは、人間が長い長い時をかけて地域の自然に働きかけ続けた結果生まれた、自前の生活文化です。そしてそれが朝市のそれぞれ独自の魅力も満たしています。

山口県では第1次産業に従事する9つの女性組織の長で構成される山口県農山漁村連携会議が昭和63年に発足しました。私の山口県林業研究グループ女性部会もその会員で、私は連携会議の副会長です。「ルーラルフェスタ」の核となつたのは、この農山漁村女性連携会議でした。「ルーラルフェスタ」の成果をふまえて、今では全県下を結び開催されるようになりました。

また、私の所は島根県と広島県との県境にあり、

その3県で県境朝市サミットをやりました。大会宣言文を読み上げ、それに賛同される方に私どもが染めた草木染めのハンカチを振っていただいた時には、大変感動いたしました。夏の暑い時に300枚のハンカチを作り、振っていただいた時の感激は本当に今でも忘れることができません。

5. 生活文化の語り部「ルーラルガイド」

平成12年、農山漁村連携会議は新たに「ルーラルウェルカムセンター」を立ち上げました。「ルーラルフェスタ」の開催によって風土の中で長い時をかけて毎日毎日磨いてきた暮らしの技、経験を持つ人たちが県内にたくさんいることがわかりました。

「ルーラルウェルカムセンター」はこの人たちを「ルーラルガイド」として登録し始めました。県内の農山漁村の様々な食材や地域に伝わる郷土料理、食文化などを都市の生活者や子供たちに紹介してもらおうというものです。私も「ルーラルガイド」の一人です。現在では500名の「ルーラルガイド」が登録されています。一方「ルーラルガイド」の情報を求める人たちを「ルーラル探検隊」として登録し、両者の積極的な交流を進めています。

昨年は、山口県で「山口きらら博」が開催されました。「みのり工房」は、私たち農業者林業者の一番のメイン会場となった所です。私たちは、育てたひまわりをまわりに植えて皆様をお迎えしました。「きらら博」を進めていくために、12年から県内各地で、ひまわりの植栽運動をしたのです。私たちのグループも6畝ほどある田んぼに植えて、ひまわりを育てました。「みのり工房」では、「ルーラル探検隊」の方たちに、お豆腐づくりやリース作りを指導しました。

6. おわりに

自然やふるさと、山や川を求めてやってくる人たちに地域を案内したり、体験実習に来られた方たちにこんにゃくの作り方、豆腐の作り方、つる

細工、草木染めなどなど紹介している中でたくさんの貴重な出会いがあります。地域の暮らしや食文化の紹介は人間として心と心が触れあい、都市の生活者と生産者と皆が喜びを分かち合っています。訪れてきた人たちが「まあ、なんと贅沢な暮らしですね」と言われます。また、仲間から「キクちゃんがいれば、元気が出る、やる気が起きる」と言われます。人間が自然と寄り添いながら暮らしている農林業というものは命を育てる技だとつくづく思います。子育てと響きあうものが農林業にはあると思います。

今、錦町に住んでいてよかったなと思います。

現在町では私の提言には耳を傾けてくれるようにもなりました。去年は、女性2名の農業委員が、私の提言で実現しました。忙しい私ですけれども、私を支えてくれる仲間、草木染めのグループ、生活改善グループ、朝市の仲間、加工の仲間、林業

振興会のメンバーがいます。

現在町の人口は減少し、高齢化しています。このまま私たちが農林業の重要性を無視し、おごった生活をおくれば、生命の存続の危機だと思えます。私は今後の真の豊かさを求めて、自分の人生のために生活文化の語り部でありたいと思えます。

最後になりましたが、このようなすばらしい大会にお招きいただき、体験発表させていただきましたことを心から厚くお礼申し上げます。72歳の高齢でございますが、これから残り少ない人生に、むち打ちながら一生懸命地域のために頑張っ参りたいと思えますので、どうかよろしく願いいたします。ご静聴、まことにありがとうございます。